

「計画的戦争準備」？

三輪芳朗

「戦争」は周到な「準備」に基づき「計画的」に開始・展開された？

「軍部」は「計画的戦争準備」を着々と進めつつ（各所で？）「暴走」し、国民に多大な犠牲を強いたというのが図式的理解・「通念」である（「藁人形を標的にしている」と考える読者は、自らの理解の実質を再確認されたい）。

「計画的」に「戦争準備」を進めたという。「準備」を進めた「戦争」として日本海海戦や旅順近郊二〇三高地争奪戦、桶狭間や関が原の合戦（ある

いは、ヤクザ時代劇の出入り？）のような「決戦」型のをイメージする読者が多い。しかも、イメージされるのは準備された武器を手にして行う「戦闘」そのものである。「来たるべき事態」に備える「準備」には関心が及ばない。同僚を含めた潜在的読者とのコミュニケーションでも「戦争」「準備」イメージのギャップ克服に最も難渋する。「総力戦体制」という表現はおなじみだが、「総力戦」およびその「準備」の実質と困難性は、当時の関係者にさえ必ずしも的確には理解されなかった。

日中戦争開始（一九三七年七月）に先行する二〇年間にわたって「計画的戦争準備」を連想させる多様な現象が頻繁に観察された。一九一八年制定の軍需工業動員法が象徴的発端である。この間、国防、国力、軍需動員、総動員、物資動員、生産力拡充、計画、統制、管理などの用語が盛んに用いられた。軍需局、軍需評議会、陸軍省兵器局工政課、国勢院（第二部）、資源局、資源審議会、陸軍省整備局、総動員計画会議、企画庁などの「組織」が次々と誕生した。軍需工業動員法、軍需調査令、資源調査法、総動員計画設定処務

要領などの法規が制定され、年度陸軍軍需工業動員計画、総動員期間計画、軍需品工業五年計画、重要産業五年計画要綱（陸軍案）、満州産業開発五年計画などの「計画」が策定された。

しかし、日中戦争開始時点で、先行したはずの「計画的戦争準備」は現実の「戦争」の「準備」として機能しなかった。「軍需動員計画」に関する岡田軍需動員班長（当時）の「軍需動員計画は一九二〇年度以来、毎年策定せられていたが、……それを実施した経験を持たない。いわゆるペーパープランとして金庫の中に保管されていた」（戦史叢書三三、七〇頁）とする回想が象徴である。日中戦争に向けて軍需動員計画を急遽策定する必要があったし、軍需工業動員法を適用するための法律および適用関連法規の整備、輸出入品等臨時措置法、国家総動員法などの「戦時立法」も「戦争」開始後に急遽実現した。軍需品工場管理が「戦

争」開始後半年経過した一九三八年一月にスタートした。しかし、管理工場の的確な「管理」に不可欠な（はずの）具体的情報の収集などの「準備」は実施されていなかった。

膨大な数の「計画」が作成された。しかし現実化した「戦争」に直接貢献する「計画」は存在しなかった。

「戦争」と「戦闘」あるいは「合戦」

日露戦争を境として顕在化した次の傾向は、第一次世界大戦を経て、いっそう顕著になった（戦史叢書九、一二頁）。

日露戦争を境として日本の国防情勢は大きく変化し、戦時所要兵力量は勢い増加した。戦時兵力量の増加は、また平時常設兵力量の増加を要請した。／常設兵力の拡張……と維持には多額の国費を要する。ここに経済的軍備構想が生まれた。平時兵力を最小限に抑制し、戦時動員によ

って所要の兵力を造成しようというのである。平戦時兵力量の差は、国防情勢の変化と常設兵力の拡大に伴って、ますます増大した。

一会戦間の砲弾の消費量でみると、奉天戦の日本軍の消費弾数（三三万発）を一として、「ベルダン」戦のドイツ軍は六〇、「ソナム」戦のフランス軍は一〇〇であった。日露全戦役間の日本軍の射耗した砲弾数は約一〇〇万発であったが、欧州戦役末期四カ月間のフランス軍の射耗弾数は約三〇〇〇万発であった。第一次大戦時、「各国とも最大製造力に達したのは、開戦後約三年に近い。また、準備のよかった国の製造力の増進は比較的急速であったが、英国、露国のように開戦初期における準備が不十分であった国では、その増進が著しく緩慢であった」。もちろん、当時の日本の製造能力と比べると、桁違いの水準であった。

政府が直面した課題の基本的性質は有澤の一九三四年の書物からの次の引用に象徴される(五九±六〇頁)。とりわけ「戦争」と「戦闘」の違いに注意されたい。

ドイツが開戦当初において軍隊動員と戦時財政施設の迅速宜しきを得た……。ドイツの戦争準備が完成してゐたといはれるならば、それはただこの二方面においてであつた……。……戦争の持続期間と軍需品消費とが普仏戦争(一八七〇―七一年)や日露戦争(一九〇四―五年)の規模にとどまつたならば、ドイツの軍需品供給の準備は完璧に近かつた……。戦時必要品の貯蔵や指定工業との兵器供給契約を含む動員計画を考へれば、当時におけるドイツの戦争準備がどの国におけるよりも進んでゐたことを首肯しうる。／＼ところが開戦後わずかに一ヶ月と経ない

うちに、最も進んでゐると考へられていたドイツの戦争準備さへ、実は戦争の準備としては全く無力であり、準備としての意義といへば、せいぜいのところ一つの戦闘に対する準備としてしか役立たなかつたといふことを暴露した。

しかも、第一次世界大戦中に大きな進展を見せた近代兵器(たとえば、航空機、戦車、潜水艦、各種電子兵器など)は兵器とそその使用法の両面でその後も急激に変貌した。将来の技術進歩、想定交戦相手が「準備」する兵器・作戦を想定して「計画的戦争準備」を有効かつ成功裏に進めることは、いかなる時代のどの政府にとつても至難であつた。

第二次欧州大戦の根本的見直しの大きな契機となつた一九六一年の『第二次世界大戦の起源』でオックスフォード大学の Taylor が示した次の見方に

共鳴する読者も多いだろう。

第一次大戦は、事実上これに参加しなかつたアメリカを除いて、参加したすべての大国に大打撃を与えた。愚かにもこれらすべての国々が大国にならうと試み続けたのだから。おそろくどの大国の兵力(strength)も総力戦(total war)には十分でない。今日では総力戦の準備だけで大国を破滅させる惧れがある。これは目新しいことではない。……これは奇妙(oddd)ではあるが避けがたいジレンマである。大国であることの目的は大戦争をも戦いぬくことにある。しかし、大国であり続ける唯一の道は大戦争をしないこと、しても限定された規模に留めることである。ここにイギリスの偉大さの秘密がある――イギリスは海戦に専念し、ヨーロッパ大陸諸国を範とする軍事力をもとうとしなかつた。

ヒトラーが総力戦による世界制覇を企図して周到な「戦争準備」を「計画的」に進めたとする見方の支持者が大きく減少して久しい。日本では依然として、日本の「軍部」が「計画的準備」に基づいて「戦争」を開始し、展開したと確信する人たちが圧倒的である。確信は「総力戦」の実質的意味に關する慎重な検討に基づくのか？

“War is a great centralizer” (Caincross, 1991) である。総力戦の「計画的準備」と「実施」はいかなる「政府」にとっても容易でない。「軍部」はそれほど無知蒙昧な人たちの集団か？ 当時の日本国民（「軍部」以外の人たちは、そのような「軍部」の暴走を長期間にわたって許容し続けたというのか？

日中戦争期も「準備」不足に悩まされた

太平洋戦争に先行した日中戦争の期

間も一貫して「準備」不足、軍需への対応能力不足に悩まれた。蒋介石政権を相手にせずの近衛声明（一九三八年一月一六日）頃の状況に關する参謀本部の戦略的判断である（河邊作戦課長の解説。前回引用に先行する部分である）。

事変前の陸軍の出師準備は、きわめて不十分であった。上海作戦で、大場鎮の占領がもう一カ月遅れたら大変であった。軽砲と重砲、榴散弾と榴弾の比率も適当でなかった。また南京攻略後数コ師団その他の部隊を新設することになると、驚くことに小銃が不足を来して、外国から購入しなければならぬことになった。軍需動員もまだ十分に整備されず、多数召集のため職工が不足して予定の生産もできないという有様であった。

陸軍省軍事課で軍需品の整備・補給を担当した中原茂敏は、国力は一九三八年度が峠で一九三九年度からは下り坂に入ったとし、次のように回想する（二九八一、七八頁）。

一九三七年度日中事変第一年度の兵器生産は、小銃四万二六〇〇、機関銃二三〇〇、火砲六七〇門、戦車三三〇輛、航空機八七九機であつて、一九三一年度に比べて約一〇倍位に増えたが、重爆撃機七二機、小銃一〇万挺、一部の砲兵用観測機をイタリアに緊急注文して間に合わせるような体たらくでもあった。／＼彈藥の不足欠乏は特に極端であつたので、予算の大部分が彈藥に配当せられ、一九三七年度は兵器費の五六％、一九三八年度は実に七六％を占めたから、火砲や戦車はこのようにしか造れなかつた……。

東信堂

シリーズ「未来を拓く人文・社会科学」

知の新たな道標(各四六・全14巻+1)
日本学術振興会・人社プロジェクトの成果

- ① **科学技術がバナンス**
城山英明編 1890円
- ② **ボトムアップな人間関係**
心連・教育・福祉・環境・社会の12の現場から
サトウタツヤ編 1680円
- ③ **高齢社会を生きる**
老いる人/看取るシステム
清水哲郎編 1890円

④ **紛争現場からの平和構築**
国際刑事司法の役割と課題
城山英明・石田勇治・遠藤乾編
(同シリーズ別巻) A5・2940円

医療倫理と合意形成
治療・ケアの現場での意思決定
吉武久美子 最適な医療決定のための合意の原則とは。A5・2940円

貨幣の社会学^{経済社会学への招待}
森元孝著 貨幣循環プロセスから見直す戦後日本社会。四六・1890円

大学改革 その先を読む
寺崎昌男 大学の真の在り方は？
好評連続講演の記録。四六・13 5円

教員養成学の誕生
弘前大学教育学部の挑戦
遠藤孝夫・福島裕敏編 A5・3360円

アメリカの教育支援ネットワーク^{ベトナムニューカムと学校・NPO・ボランティア}
野津隆志 四六・2520円

早稲田政治学史研究
もう一つの日本政治学史
内田満 その大きな足跡を総括した著者の最後の著作。A5・3780円
—同著者好評既刊—

政治学入門 四六・1890円

政治の品位 四六・2100円
日本政治の新しい夜明けはいつ来るか

(価格は税込定価表示です)
〒113-0023 東京都文京区向丘1-20-6
☎03-3818-5521 FAX03-3818-5514
http://www.toshindo-pub.com

その後も状況は好転しなかった。兵器本廠長の「支那事变第二次実施訓令に依る軍需動員実施の概要」(一九三九年六月三〇日作成)は、一九三八年四月から一年間の軍需動員に関する「総括的所見」で「今次軍需動員の実績に鑑みるに本事変は不企に発したる關係上、軍の戦時需要額に應ずる資源を確保するの余裕を存せざりし為、未だ真の国力を賭するの戦争に至らざる現況に於て既に各種の資源の不足を告げある状態なり」とした。期間中である武漢・広東攻略後の一九三八年一月二二日「東亜新秩序建設」の近衛声

明が発表された。「帝国は一九三八年秋季戦局終結の機を補足する目的を以て、広東及武漢攻略の積極作戦を実施し、赫々たる戦果を収めたるも」、目的である蔣政権の崩壊、さらに戦局終結には至らず、長期持久戦を覚悟せざるを得ない状況であった。「概要」作成の数カ月後、ノモンハン事件後の一九三九年一月二日満州の師団長から参謀次長になった澤田茂中将は、当時の状況を次のように回想する(戦史叢書八、六二四頁)。

自分が参謀次長になるや、支那事变が長びき日本の力がどの位残っているか……あらゆる方面から検討してみた。／外に向かつては強いことをいうが、ちょうど果物の芯が腐っているようなもので、そう長くはもたないと思えた。畑陸相も同様に判断していた。支那事变は武力決戦によって解決の緒を見出すことはできない。支那軍に対しては決戦はできない……。蔣介石は、抗日を断念すれば立ちどころにその政権は瓦解するから、どこまで追いつめられても屈服はしない……。また、……われわれがこの後、撃退されることは、

多少兵力を減じてもまずないであろう。支那事変は全面撤兵すれば別だが、有終の美を収めようとすれば日支両国の間では解決できない。世界的事件にひっかけて解決するよりほかに方法がない。

そして、太平洋戦争……

この二年後に太平洋戦争が開始された。日本の国力・経済力などを考慮して、開始時点で開戦に賛成した指導者のほとんどが短期間での決着・終結を想定した。かかる想定・期待は現実化せず、決定的劣勢のうちに、長期戦が不可避となった。現実には、緒戦期から半ばに至る時期の基地航空部隊を中心とする航空兵器（兵力）によるガダルカナル島をめぐる「消耗戦」が太平洋戦争の帰趨を決する「戦鬪」であったし、この「戦争」を象徴する。この「消耗戦」は以下の三つの意味で「想

定外」の事態（「想定外」³、「想定外」の三乗の事態）であった。

(1) 「不企に発した」日中戦争が米英中心の連合国を相手とする太平洋戦争にまで展開すると日中戦争開戦時より予測し、さらに「計画」した「政府」首脳（軍首脳を含む）はほとんど存在しなかった。

(2) 日中戦争から太平洋戦争に至る「戦争」を主導し中心的役割を演じた「主役」は陸軍であった（とされる）。しかしこの「消耗戦」の「主役」は海軍であった。

(3) 「国防方針」に従って二〇世紀前半を通じてアメリカを仮想敵国とした海軍を主導したのは「大艦巨砲主義」であった。海軍は、西太平洋上で艦隊決戦を想定して軍備・演練を進め、航空兵器（兵力）を艦隊決戦の補助兵力と位置づけ続けた。しかし「消耗戦」の主役は航空兵器（兵力）、しかも航空母艦ではなく陸上飛行場を基

地とする航空兵器（兵力）であった。そのうえ、「戦争」は決戦型ではなく、長期間にわたって継続する「消耗戦」であった。

『計画的戦争準備』の成果は何処へ？ 『総力戦体制』はどこで確立され機能したか？』と自問して欲しい。

* 本連載（四回予定）は三輪芳朗

『計画的戦争準備・軍需動員・経済統制——続「政府の能力」』（二〇〇八年春、有斐閣から刊行予定）の広告紹介文である。前号掲載の「1『軍部の暴走による先の戦争……』」は、有斐閣書籍編集第二部ホームページ（<http://yuhikaku-nibu.txt-nity.com/blog/>）からダウンロード可能である。

（みわ・よしろう）

東京大学大学院経済学研究科教授